民話ゆうわ座

- 話に遊び 輪を結び 座に集う -

第六回 民話ゆうわ座　資料

『民話のなかのじじとばば
～一粒の豆をめぐって～』

―わたしたちが聞いた語りの中から―

―もくじ―

一「豆と地蔵さま」　話・大友かのえさん（大正九年～平成一〇年）……1頁

二「豆こと地蔵さま」　話・砂金範男さん（明治四四年～平成四年）……4頁

三「地蔵さんに食われた豆」　話・小松仁三郎さん（昭和七年～平成二八年）……7頁

四「鼠（ねずみ）と豆」　話・曾根つき子さん（大正一二年生）……17頁

五「ネズミ浄土」　話・永浦誠喜さん（明治四二年生～平成一四年）……20頁

六「一粒（つぶ）の豆っこ」　話・伊藤正子さん（大正一五年生～平成二九年）……24頁

七「豆っこ話」　話・楳原村男さん（大正八年生～平成二一年）……26頁

八「豆っこないでばやぁ」　話・小松仁三郎さん……27頁

一　豆と地蔵さま

むがす、あったづぉんなあ、ほれ。

ばんつぁん、豆ぶちおわって、掃(は)きかたしたれば、豆ひとつぶ、ころがっていたんだと。

「あら、いだましやあ」

って、豆さ追(ぼ)っかけでいったんだと、ほれ。

ほしたら、豆、鼠穴(ねずみあな)さ入っていったんだと。ばんつぁんが、追(ぼ)っかけで、鼠穴さ入っていったれば、向こうのほう明るく開げてで、そこさ地蔵(じぞ)さま、立ってござったんだと。

「地蔵(じぞ)さま、地蔵(じぞ)さま。豆、ころんできえんかったべか」

「ああ、ころんできた。そこどごにあっから持っていげ。ひとつぶばりの豆、よぐ大切にするなあ」

ってばんつぁん、地蔵さまにほめられたんだって。

「んで、ばんつぁん、いいこと教えっから、おれのいうこと聞け。今晩、こごさ博打(ばくち)ぶち来っから、鶏(にわとり)のまねしろ。とにかく、今晩、来い」

そういわれて、ばんつぁん、家さ帰ってきたんだと。

そして夜になってから、また、行ったんだと。そうしたっけ、地蔵さまに、

「隠(かぐ)れでいなげねから、おれの膝(ひざ)かぶさ、あがれ」

っていわれた。

「だれ、地蔵(じぞ)さまの膝かぶさ、尊(とうど)くてあがられえん」

つったんだと。

「いいから、そんなこと語(かだ)んねで、あがれ」

っていわれだ。ばんつぁんが膝かぶさあがると、

「んで、こんどは、肩(かた)さあがれ」

「だあれ、膝かぶでさえあがれねえの、肩まであがれっていわれても、とっても尊(とうど)くてあがられえん」

「そんなこと語(かだ)んねで。いいがら、おれ、あがれっていうんだ

がら、あがれ」
したっけ、こんどは、
「頭さあがれ」
「なんでがすけな、地蔵(じぞ)さまの頭まで、とってもあがられえん」
つったんだと。
「そんなこと、語んねで、いいからあがれ」
っていわれて、頭さあがって、待ってたんだと。
そうしたっけ、博打ぶち、地蔵さまのお堂(どう)さ来てね、博打はじまったんだと。

でっちんじょろ　猫のくそ
でっちんじょろ　猫のくそ

そうして、ほれ、夜もふけできたからってね、地蔵さま、ばんつぁんのどご、ちくっと突(つっ)いたんだと。そのとき、ばんつぁん、地蔵さまにいわれたから、

コケコッコー

って、鶏(にわとり)の鳴き声出したんだと。
「ありゃ、一番鶏(どり)、鳴いたでやは」
って、博打(ばくち)ぶち、いったど。
して、またしばらく、

でっちんじょろ　猫のくそ
でっちんじょろ　猫のくそ

って、博打してたんだと。
やんべえころになってから、またちくっと突(つっ)かれたんだと。
したから、ばんつぁん、また鳴いだと。

コケコッコー

「あら、二番鶏(どり)だは」
しばらくして、また突(つっ)かれたんだと。ばんつぁん、また、

コケコッコー

って鳴いたんだと。
「あららら、三番鶏(どり)、鳴いだ。こんなにはやく、夜明けるっつ

ごとあんべっちゃや」

って、まあず、博打ぶちたち、銭(じえに)、かたづけないで出ていったんだと。そうしたっけ、地蔵さま、

「残ってた銭(じえに)、おまえさけっから、持っていけ」

つったんで、もらって帰ってきたんだと。

「火っこたもれやあ」

って、隣のばんつぁん、来たんだと。

「なんだや、たまげで金持ちになったや。なじょなわけだか、おれさ教えろ」

つうんで、

「こういうわけで、豆、ころんでいったの、追(ぼ)っていって、拾ってきたら、こいなんだ」

つった。隣のばんつぁん、

「おれも、まねっこする」

って、ころんでいくもしねぇ豆っこ、わざに穴さ入れでやって、追(ぼ)っかげでいったど。

したっけ、やっぱり、地蔵さま、立ってござったと。

隣のばんつぁん、

「膝かぶさあがれ」

ともいわれねえ。

「肩さあがれ」

ともいわれねえ。

「頭さもあがれ」

ともいわれねえの、ああ、ずかずかあがって、そして、待ってたんだと。

待ってるうちに、博打ぶちきて、博打はじまったと。隣のばんつぁん、地蔵さま、合図もなにもしねえのに、

コケコッコー

って、鶏のまねして鳴いたんだと。

時でもないのに鳴いだから、

「なぁんだ、きのうもおがしいと思ったけ、あいつ、うそ鶏だ」
って、博打ぶちどもに見(め)っけられで、
「きのうも、おらどご、ばがにしたべ」
って、隣りのばんつぁん、はだかれで、銭(じぇに)もうけるどころか、
ほうほうのていで、帰ってきたんだとやあ。

こんで　よんつこ　さげたどやは

みやぎ民話の会叢書第三集
「大友かのえの昔語り　むがす　あったづぉんな　ほれ
—宮城県志田郡三本木町—」より

二　豆こと地蔵さま

むがーしむがし。
じんつぁまとばんつぁま、あったんだど。ばんつぁま、庭掃(は)
いったら、豆こひとつ、ころっと転がってきた。
ばんつぁまが拾うべとしたら、ころころころっと転がって、
ネズミ穴さ入(へぇ)ってしまった。
「あらあら、いだましやあ」
ばんつぁま言ったら、じんつぁま、
「おれ、取ってくっから」
って、ネズミ穴さくぐっていったんだと。
ネズミ穴、深くて、どこまでも続いてんだとや。じんつぁま、
いっしよけんめい掘っていったと。ずうっと掘りながらいった
ら、地蔵さま、いたんだと。
「なしてこいなどこさ来たや」

「豆こ、ひとつ落としたから、探しさ来した」
「んだら、俺の膝(ひざ)さ上がれ」
「だれ、もったいねくて上がられねえ」
「いいがら上がれ、いいがら上がれ」
地蔵さま言うから、上がったんだと。
　したら、
「肩さ上がれ」
って言うんだと。
「もったいねくて、上がられねえ」
「いいから肩さ上がれ。今度は頭さ上がれ」
「膝さ上がるのももったいねえのに、頭さなんか、ことさら上がられねえ」
「いいがら上がれ」
言われて上がったれば
「いいこと教えっから」
って言わったんだと。
「そこさ、簑(みの)と、二尺ぐれえの竹こ、あっぺ。今晩、そこのニワトリ小屋さ、博打(ばくち)ぶち来る。みんなで銭(ぜに)出して博打ぶってから、パタパタパタっと簑はたいて、コケコッコーってニワトリの真似しろ」
って教えらったんだと。
　待っていたれば、博打ぶち何人も来て、博打ぶちはじまった。銭どっさり出してあんだと。
　じんつぁま、いあんべなころ（ちょうどいいころ）、ニワトリが羽ばたきするみてえに蓑をパタパタッとはたいて、
「コケコッコー」
ってトキ作ったんだと。
　したら博打ぶち、
「なんだ、今日は。夜ぉ明けんの早(はえ)えな。役人さま来て、ごっしゃがれっと（しかられるぞ）」

って、銭置いて、逃げてしまったと。

その銭集めて、家さ来て、ばんつぁまと語ったんだと。

「ほんで、何もねぇから、赤え衣裳（晴れ着）など買ってくるべえ」

って町さ行って、赤え衣裳買ってきて、着てたんだと。

隣のばんつぁま聞きつけて、

「なして、ここの家で、赤え衣裳着てんのや」

って言うから、語ったんだと。

「そんで、おら家でも地蔵さまさ行って、こいなふうにすんべえ」

って、家のじんつぁまと相談して、前庭ささっぱと豆ちらかして、掃きかたしたんだと。

したらそのうちのひとつ、やっぱりネズミ穴さ入ってったんだと。ばんつぁまに尻はたかれて、隣りのじんつぁま、しゃあねくて（仕方なく）掘っていったれば、やっぱり地蔵さまいた。

上がれとも言われねえのに膝かぶさ上がる、上がれとも言われねえのに肩さ上がって、頭さ上がったんだと。そして、

「地蔵さま地蔵さま、博打ぶち、どこにいすぺがね」

って聞いたれば、地蔵さま、

「あそこさ来っから、ニワトリ小屋さ上がってて、銭出したらば蓑パタパタはたいて、トキ作れ」

って教えたんだと。

んで、隣りのじんつぁま、ニワトリ小屋さ上がって待ってたんだと。

博打ぶち来て銭出したから、さっそくパタパタやったんだと。

したれば博打ぶちだぢ、

「なんだやあ、今日はあんまり早えな。まだ夜ぉ明けるくせぇでねえんでねえか」

じんつぁま、ほんでわがんねと思って、またも蓑はたいてパタパタってやったら、

「なんだ、なんだ。おがしねえやづ、いた」
って言いはだった（言いはじまった）んだと。
じんつぁま、びっくりしてね。押さえらってから大変だから、板っこかぶって逃げっとこしたら、釘（くぎ）あるの知らねえで、なんだもかんだも、そいづさ急所ひっかけてしまった。
「ばばに騙（だま）さって、おら、あぶねぐ死ぬどごだった」
って、急所押さえて、はぁ、命からがら逃げてきたと。
んだがら人の真似したって、銭もうけなどできないんだと。
こんで、えんつこもんつこが　さげだんだと

みやぎ民話の会叢書第八集
「土地に根ざした民話　砂金範男の語り
千葉直次の語り」より

三　地蔵さんに食われた豆

むかーし、あったづでや。
えらく情け深いじんつぁんとばんつぁんがおったとしゃ。
お正月が来たつうのに、その年は不作でなんも穫れなかったつうんだ。
ばんつぁんが寝てて、
「じんつぁんやぁ、今年はお供（そな）えするものなんにもないなぁ」
って言ったと。じんつぁんが、
「ばんつぁんや、裏の山から穫れたあの豆殻（まめがら）や、あいづをたたいてみたら、お供えするぐらいの豆っこ、のこっているんでないか」
って言ったつうんだ。
つぎの朝、暗いうちに起きて、二人でいっしょけんめ豆殻たたきはじまったと。

そうしたら、うんと実の入った大きい豆がぴょんとひとつ、跳びだしてきたつぉん。

じんつぁんが、それ見て、

「ばんつぁんや、それ、えらい豆ころげていった。逃がすな」

って言ったつんだ。

ばんつぁんが、

「ああ、いたましい。いたましい」

と、追いかけていったら、庭のすまっこのネズミ穴さ、ぽたんと入っていってしまったづもな。

ばんつぁんが、がっかりして、

「じんつぁんや、ネズミ穴さ逃げられてしまったやぁ」

って言ったと。

じんつぁんが、

「くやしいな。したら、薪割るとき使う手斧で掘ってみっから」

って、手斧で、どんどん、どんどん、ネズミ穴を掘っていったと。

ああ、いっしょけんめ掘って掘って、掘りぬいて、どこまでも行ったつんだ。

そしたら、広い広い原っぱさ出てしまったづもな。

じんつぁん、びっくりして、

「こんな広い原っぱ、なんぼさがしても見っかんね」

って、辺りをぐるぐる見まわしたと。

遠くのほうの原っぱの真ん中に、お地蔵さんが立っていたと。

じんつぁんがお地蔵さんのところさ行って、

「お地蔵さん、お地蔵さん、この辺さ大きい豆ころがってこなかったすか」

って聞いたんだって。お地蔵さん、なんにも言わないで下見ていたと。

「お地蔵さんさ話したってわかんねべけんども、今年は不作でなにも穫れなかった。お正月来っから、お供えしなくてわかんねと思って、豆たたいたら、一番大きな豆がころげてネズミ穴

さ落ちた。そいづを追っかけてきたら、この原っぱさ来てしまった。お地蔵さん見なかったべかな」

って、またも聞いたつもな。

お地蔵さんが、そいつを聞いて、

「さっきな、どっからともなく、えらい豆ころげてきて、おれの膝んところに来たんだもな。このごろ、こんな大きなうまそうな豆、見たことないし、辺り見たれば、だれもいない。ほんで、これ、おれさお供えしたんだと思って、だまって食ってしまった。えらくうまい豆だったと。じんつぁん、悪がった。だまって食って、悪がった」

って言ったつんだと。

じんつぁん、

「しかたなかんべ。お地蔵さんが食ったんだらいいよ。ばんつぁんに、お地蔵さんが食って喜んでいたって教えればいいんだから」

って言ったんだとしゃ。

お地蔵さんは、そいつ聞いて、

「じんつぁんや、ちょっとおれの膝さ乗っかってみろ」

って言ったづもな。

じんつぁんがびっくりして、

「ああ、とんでもねぇ。お地蔵さんの膝さなんど、もったいなくて上がらんね」

って言ったど。したら、お地蔵さんが、

「いいからじんつぁん、ちょっとでいいから、乗ってみろ」

って言ったつうんだなぁ。

「んで、お地蔵さんの言うとおり、ちょっとだけな」

って、お地蔵さんの膝の上さ、ちょこんと乗ってみたと。

したら、お地蔵さんが、

「背中さまわってみろ」

って言ったづもな。

「ああ、だめだ、だめだ。お地蔵さん、膝さ乗るばりでももったない。背中さなんぞ、とってもまわらんねぇ」
って言ったと。
「そんなこと言わないで、じんつぁん、おれの言うことも聞いてやあ、背中さちょっと乗って見ろ」
って、お地蔵さんが言ったつぉん。
　せっかく言われたんで、じんつぁん、
「んで、ちょっとだけ、お地蔵さんに乗ってみっからね」
って、背中にまわって、よいしょと乗っかってみたんだと。
　したら、お地蔵さんが、
「もうひとつだけな。首っこ乗り（肩車になって乗ること）してみろ。がんばって上がってみろ」
って、また言ったづもな。じんつぁんがびっくりして、
「ああ、そいつは無理だ、無理だ。どこにお地蔵さんの頭さ手かけられるべや。なんぼしたって上がらんね」
って言ったんだって。お地蔵さんが、
「いいから、今日は特別だから上がってみろ。なんぼしたって上がってみろ。ちょっとでいいから、上がってみろ」
って、また言ったと。
「んで、ごめんなすてもらうからね」
って、じんつぁんが、お地蔵さんの首たまさ、
「よいしょ」
とかじりついて、首っこ乗りしてみたつうんだ。
　したら、お地蔵さんが、
「じんつぁんや、うんと遠くまで見えっかあ」
って聞いたづもな。
　したら、じんつぁんが、
「うん、見える、見える、どこまでも見える。えらく高いところさ上ったから」
って言ったって。

「うんと向こうに、大きな大きな家、見えないか」
「うん、見える、見える。えらく向こうだなぁ」
「あの家さなぁ、晩(ばん)げまでかかるけんども、なんぼ疲れても行ってみろ。夜になると、とても楽しいことばかりあるど」
　じんつぁんが、
「んで、お地蔵さんの言うとおり行ってみっから」
って言ったら、お地蔵さんは、
「ころあい見て、ニワトリの真似(まね)しろよ」
って、じんつぁんに箕(み)を持たせて、なにやらいっしょけんめ教えたんだとや。
　じんつぁん、言われたとおりいっしょけんめ歩いていって、暗くなるころまでかかったら、大(おっ)きな大(おっ)きなだれもいない家さ着いたつうんだ。
　じんつぁんは、お地蔵さんに言われたとおり、だまってかくれていたと。

　そしたら、どっからともなく、
　　ほほー、ほほほほー
って、えらくにぎわしい音してきたんだつぉん。
「なんだ、これ。暗くなってから、いっぱい人、集まってきたなぁ。なにあんだべ」
って、じんつぁん見ていたつうんだ。
　そうしたら、赤鬼(おかおに)だの青鬼(おおおに)だのいっぱい集まってきて、
「ああ、寒い寒い。お正月になったのになや。火っこばり（火だけ）でもたけっちゃや」
って、どんどん火たいて、
「酒っこでも飲むべっちゃや」
って、みんなしてゆかいになって、今度は唄っこなんどもうたう鬼も出てきたっけど。
　じんつぁん、なにはじまんだべって思って、そいづ見ていたんだって。したら、

「お正月だからや、景気よく、ひとつ勢いつけろっちゃ」
って、鬼ども、大判小判ばらばら出して、
「負けたどや」
「勝ったどや」
って、銭(ぜに)のやりとりはじめたんだって。
じんつぁん、そいづ見ていたが、いっぱい銭ならんだころになったら、
バタバタ　バタバタ
と、箕をたたいて、
コケコッコー
って、ニワトリの真似はじめたづもな。
鬼ども、そいづ聞いて、
「ありゃ、今日の一番鶏(どり)、いつもより早く鳴いたんでないが」
って言ったど。したれば、
「いい、まだ夜明けないから、急げ、急げ」
って、また銭ばらばらと出してはじまったつうんだ。
じんつぁん、またも、
バタバタ　バタバタ
と、ニワトリのはばたく音真似して、
コケコッコー
って、ニワトリの鳴く真似したんだと。
したら、鬼ども、びっくりして、
「夜明けて来っど。早く逃げろ」
と、銭もなにもみんなぶん投げて、どんどんと行ってしまったって。
あわてて、自在鉤(じざいかぎ)さ鼻などひっかけて、ふっとんでいく鬼もいだったど。じんつぁん、おかしいけんども、がまんしていたんだと。
そのうち明るくなってきたっつもなぁ。
じんつぁん、炉端(ろばた)さ、ばらばらといっぱい落ちていた銭をひ

ろいあつめて、お地蔵さんとこさ行って、
「お地蔵さんに言われたとおりに、赤鬼青鬼が来たところで、ニワトリの真似したら、銭いっぱい忘れていったから、こんなに集めてきた。今日は、お地蔵さんのとこさ、みなお供えしていくからわ」
って言ったと。
　お地蔵さんは、にこにこ笑いながら、
「じんつぁんや、きのう、じんつぁんの豆食べて悪かった。正月来たからな、ばんつぁんさ、お土産にその金ば持っていけ。いい正月するように」
って言ったづもな。
　じんつぁん、えらく喜んで、ネズミ穴こば、
「よいしょ、よいしょ」
と、銭こいっぱい入った袋を背負(しょ)って、もどってきたつんだなぁ。

　じんつぁん、ばんつぁんにこれこれこういうわけだって語(かた)って、
「なぁ、ばんつぁんや、なんぼおら家(い)貧乏でも、こんなに宝を見(め)っけだんだから、隣(となり)の人、みんな呼んできてや、お正月だもの、お祭(まつ)りすっぺ」
ってなったと。
　ばんつぁんが、
「おら家(い)貧乏だから、今までさっぱり呼ばらったことない。んだから呼ぶことない」
って言ったんだって。
　したれば、じんつぁんが、
「そんなこと言わないでや。今年は不作で、みんな貧乏してるんだから、お地蔵さんにもらったものだもの、みんなさ分けっから、呼んでこい」
って言ったつぉん。

さあ、隣の欲たかり爺(じい)だのみんな集まってきて、
「なにして、こんなに宝、手に入れた」
って、うんと聞かれたと。
じんつぁんは、酒こも飲んだし、気分もいいから、
「こういうふうにして、お地蔵さんさ、豆っこころがして食(か)せたらば、こんなに金、手に入った」
って、すっかり教えてしまったつうんだ。
隣の爺、欲たかりだから、
「おれも、なんぼしたってもらってこなくてわがんね」
って言い出したと。
そうして、朝暗いうちに、豆っこひとつ、ネズミ穴さ、ころころと入れてやったと。いっしょけんめ穴掘って、ずうっと行ってみたと。
そしたら、やっぱり隣のじんつぁんが言ったみたいに、大きい原っぱさ出たとやぁ。はるか向こうにお地蔵さんがいたんだと。
「お地蔵さま、お地蔵さま、ここさ豆来たべ」
お地蔵さんは、だまっていたっけど。
「なんぼしたって来たわけだな」
って言ったが、お地蔵さん、返事しないっけど。
「返事などしなくたって、ごめんなしてもらうから」
って、膝かぶさ、
「どっこいしょ」
と、乗ったって。お地蔵さん、
「痛(い)で痛(い)で痛(い)でえ」
って言ったづもな。
「痛(い)でなんて言ったってわかんね。背中さまわってみっから」
って、背中さ上がったけ、お地蔵さん、
「重(おも)て、重て」
って言ったと。

「重てなんて言ったって、がまんしてけろ」
って、首たさつかまったと。
「あっ、痛でで、痛でで」
って、お地蔵さん、言ったつぉん。
「そんなこと言ったって、高いところさ上がんないと、見えないんだ」
って、隣のじんつぁんから話を聞いてるから、どんどん首たまさかじりついて見たつうんだ。
「ああ、隣のじんつぁん語ったのあの家だな。あっちの方角さ行けば、あの家さ行くんだな」
って、欲たかり爺、ひとりごと語って、急いでいったから、うんと早く着いたとさわ。
「さて、どの辺さかくれたらいいかな。すぐに銭手に入れるために遠くにかくれないほうがいいな」
って、戸棚の脇さぴったとかくれていたつんだ。

暗くなるころ、
ほほ、ほほほほー
って、にぎやかな音、はじまったと。
「ははあ、あの鬼どもだな、銭おいていったの」
って思ったと。
そうしているうちに、赤鬼と青鬼、やっぱり来たっけど。
「さあ、火たけ、火たけ」
って、けむり、ぶかぶかとふかしたら、爺がかくれていたとこまでけむってきたっつうんだ。とってもけむたかったけど、がまんしてたづもな。
そのうちに、酒こ飲むことになったんだって。
さあ、爺、待っていられないから、
バタバタバターー
と箕をたたいて、
コケコッコーー

って、ニワトリの真似したと。したれば、鬼、どでんして（びっくりして）、

「今日は、火もたかないうちから、一番鶏、鳴いたどわやぁ」

って言ったつも。

それから、爺、なんぼしたって、これ以上待っていられないから、わらわら、今度は二番鶏の真似して、また、

バタバタバター

と箕をたたいて、

コケコッコー

って、鳴いてみたっつうんだ。

したれば、鬼ども、

「こったに早く夜明けるはずがない。なんだかおかしいなや」

って言ったつも。

爺、三回目も箕をたたいて、

コケコッコー

って鳴いたと。したれば、

「こんなにニワトリ鳴いたのきいたことねぇ。だれかいたんでないかや」

って、さがしたつうんだ。

そうしているうちに、爺、かくれていたの見っけられてしまったと。

「きのう銭いっぱいおいたの、どこさいったかと思ったれば、この野郎たがって（持ち運んで）いったんだな」

って、隣の爺、げんこつ、ごんごんもらってしまったづもな。

そうして、青くなって泣きながら家さ帰ってきたと。

隣の爺、さっぱり宝物、手にはいらなかったんだってさ。

みやぎ民話の会叢書第七集

「小松仁三郎のむかし語り・はなし語り

どーびんさんすけ　さるまなぐ」より

四　鼠（ねずみ）と豆

むかし、おじんつぁんとおばんつぁんいたんだって。またちょっと離れて、おじんつぁんとおばんつぁんいて、となり同士で暮らしていたんだって、仲良くね。

で、あるとき、春先だなぁ、豆まくころね。こっちのおじんつぁんが、カゴに豆を持って、畑さ豆まきに行った。

ほすたら、一匹の鼠（ねずみ）あらわれて、一粒ほろーっと落とした豆、くわえてった。

〈こりゃ、ふしぎなもんだなぁ〉

石さお尻ついて、豆転がしてやった。また、拾っていった。何回やっても持っていくの。ほこにあるだけ転がして、みんな拾って穴さ入（へぇ）ったんだってね。

〈ふしぎなもんだなぁ〉

って思ってねえ。ほすてたっけ、鼠、穴から出はってきて、

「おじんつぁん。いっぱい豆いただいて、どうもありがとうね。家で今晩いっぱいご馳走（つつぉ）つくって、おじんつぁんにお上げすっから、一緒においで」

っていうんだって。

「なんで、おれ、鼠のどご、穴に入（へぇ）って行かっれけやぁ」

って、おじんつぁん、いったって。

「大丈夫だから、わたしについて入（へぇ）ってけろ」

って。ほすて、入（へぇ）って行ったらね、まあ、奥は広くて、まあ、いろいろさまざまな宝物並べた部屋がいっぱいあるんだって。

〈あらぁ、鼠ってこんなに立派な部屋つくって暮らしてる。ふしぎなもんだなぁ〉

と思ってね、おじんつぁん。

ほすて、ご馳走（つつぉ）いっぱいいただいて、お酒飲ませらって、踊りおどる鼠、まず、こっちでは鉢巻きして餅搗きだって。

どっこい　どっこい

今年ぁ　豊年満作で
猫の音　聞きたくねぇ

こういう唄うたんだってね。

〈なるほど、鼠だから猫来たら、みな取られる。これはほんとの唄だなぁ〉

おじんつぁん、こう思って、まず、いっぱいご馳走(つつぉ)になったんだって。

「さあ、そろそろ時間だ。おばんつぁんも待ってっぺから、このへんでお暇(いとま)すっから」

つって、ほれ、いったっけ、鼠の一番偉いやつが、

「いま宝物上げっから、重い宝良(い)がすか。軽い宝良(い)がすか」

っていったんだって。

「おれ、年寄りだから軽いのいいなぁ」

って、軽い宝物もらってきて、ほすて、朝方に帰(けぇ)ってきたんだって。

家さ着いて、その箱開けたっけ、たいした宝物いっぱい入(へぇ)っていたんだってね。なんの宝物だか知らねぇけっどね。

そすたら、となりのおじんつぁん、垣根越しに、曲がって見たんだって。

「なんで、あんな宝物、どっからもらってきたんだ。だれにもらってきた」

朝そうそうに、ほら、聞きに来たんだって。

「おれはこうやったっきゃ、鼠の家さ連れてかれて、そすて、えらいご馳走(つつぉ)んなって、ほうすて宝物もらってきたんだぁ」

って教えたんだって。

「ほうか。ほんでぇ、おれさも教えろや。それ行くのはどこだか」

と、こうなったから、教えたんだって。

となりのおじんつぁんも行って、豆転ばしてけたんだって。

やっぱす、鼠来て、ほら、

「今日は別なおじんつぁんだけっども、いっぱい豆もらったか

ら、どうもありがとう。また、ご馳走上げっから家さ来てください」

っていわったから、よろこんでついて行ったんだって。

鼠のやつは、相変わらず餅搗いて、

どっこい　どっこい

今年ぁ　豊年満作で

猫の音　聞きたくねぇ

って、うたい出すんだって。

〈こいつ、猫の真似したら、この部屋の宝物、みんな、おれ持っていかれんだ〉

と、こう思ったんだって。ほうすて、いやんべに（いいあんばい）になったら、

ニャオー　ニャオー

って鳴き真似したのしゃ。

「そぉらっ、猫来た」

鼠、叫んだっけ、真っ暗になってね、どこが出口だか、どっから入ってきたのか、わかんなくなってしまったんだって。ほんでもって宝物も見えねぇんだって、あんなにあった宝物ね。

ほすて、そっちこっち探したっけ、手斧つうのあったんだって。それで土掘ってね、

「このへん掘ったら、家の近くだべな」

って、いっしょけんめに掘ったんだとしゃ。

すたっけ、おばんつぁん土間にいて、藁打ちしてたんだって。ちょうどおばんつぁんのお尻んどごを、ほれ、掘って上がったんだってしゃ。なんか、土、もっこもっこっていうもんだから、おばんつぁん、

「あらぁ、おっかしいもんだなぁ。こいつ、モグラの野郎か、鼠の野郎か、ひとつやっつけっかな」

って、熱湯かけたんだと。うん、知らずにね。

「モグラの野郎、鼠の野郎、うまく死んだべなぁ」

って掘ってみたら、おじんつぁんだったって、死んだのね。
だから、人が宝物持ってきたって、人真似するもんでねぇんだからな、って教えられたの。

「宮城県黒川郡　七ツ森周辺の民話」日本民話の会発行　より

五　ネズミ浄土

むがし。
おじんつぁんとおばんつぁんあって、おじんつぁんが団子(だんご)好きだがら豆粉(まめご)（きなこ）さ包(くる)んだり、あんこさ包(くる)んだりして、とにかく毎日のように団子持っていって、タバコ（農作業の合間にとる軽い食事）に食(か)せでやんだど。
あるどき、団子食ってたれば、その足元にネズミ穴あって、小(ちっ)せぇ子っこネズミっこ、ちょろちょろ出はってきて、おじんつぁんが食ってるのを、顔、上げ下げして見てんだと。
「お前も食いでぇが」
豆粉さ包(くる)んだ団子だったから、
「食ってみろや、ほれ」
って、一つやったれば、チュウ、チュウって叫(さか)んで、くちゃくちゃとしゃぶってから、そのあと穴の中さ、そいづ持って入(へぇ)ってし

まったど。

次の日になって、同じように団子食ってたら、今度ぁ、三匹の子っこネズミぁ来て、顔、上げ下げしてる。

「なんだっけ、今日は三匹いたのか。お前だち、半分ずつして食しぇっから」

ってやったれば、そいづ少し食ってから、あとみなネズミ穴さ持っていったど。

でぇ、三日目になったら、今度ぁ、五、六匹の子っこネズミあらわれたんだと。

「とっても食しぇ足でねっちゃや。ほんでも、仕様ねぇから、分けて食ぇやなあ」

って、箸でちぎって、みな食わせたんだと。

四日目になったら、今度ぁ、親ネズミ来たど。

「おじんつぁん、おじんつぁん。毎日、子どもだちさ団子食しぇでもらって、うんと喜んで帰ってきたでば。おれ、餅ついてご馳走すっから、あばいん（行きましょう）」

って語ったんだと。んでぇ、

「どごにぃ、お前どごさ行ぐには、ネズミ穴さ入んねとわがんめぇ。おれ、入られねっちゃや」

って語ったら、

「おれ、手ぇ引っぱっから、おら家まで行ぐにいい。あばいん。手ぇとって引っぱるから、目ぇつむってらいん」

って。そして、ネズミに引っぱられ次第に行ったれば、どごをなじょに来たのが、わがらねぇげっつも、ネズミの家さ着いたど。

着いたれば、やっぱり餅つくふうで、セイロから湯気が、ほうほうと出でて、つくばりになっていたど。

「いま、餅ついてご馳走すっからね」

って語って、つきはじめたど。

ネズミっこどもは二匹してつく。一人は相取りして、かけ声かけんのに、

この里に、ネコさげいなけりゃ
おっかなぐねぇ
って語って、ぽつ、ぽつ、ぽつ、ぽつと、つくんだと。何回も、そいづ、
この里に、ネコさげいなけりゃ
おっかなぐねぇ
ぽつ　ぽつ　ぽつ
って。そして、つき上がったの、ご馳走(つつぉ)になったど。なになに食(か)しぇらったか、わがんねぇげっつも、とにかく食(か)しぇらって、
「腹いっぺになったから、帰(けぇ)るわや」
って帰(けぇ)っどごしたら、手ぇ引っぱって、
「お土産に、おら、落ぢてた金(かね)拾って、使いかねるのあっから、それをやっから」
って、お金もらったんだと。
親切にしたおじんつぁんは喜(よろご)んで、はぁ、帰(けぇ)ってきたんだと。
そして、そのお金、足しになって、よほど格好よくなったんだと。

そごさ、隣のおばんつぁんが火もらいに来たんだと。
「なんだべ。こっちで景気良(い)ぐなったようだが」
って聞ぐんで、いままでのことを話したど。
「ほんでぇ、おれどごのじんつぁまも、やんなくてわがんねぇ」
って、畑さやって、団子を持ってって、ネズミの来るの待ってたれば、やっぱり来たから、団子食わせたど。
三日食わせて四日目が来た。じんつぁまんどご、迎(むげ)えにきたんだど、親ネズミね。行ってみたれば、やっぱりセイロから湯気立って、餅つくばりになってたんだと。
それから、縁側さ、いっぱい金(かね)干してらの、目についたんだと。
餅よりなにより、その金(かね)欲しくなったと。
この里に、ネコさげいなけりゃ
おっかなぐねぇ
ぽつ　ぽつ　ぽつ
ネズミだちが、つきはじめたれば、

「なに、餅など食(か)しぇられなくたっていいから、さっぱと銭(ぜに)持っていくべ」

って、じんつぁま、叫(さか)んだと。

ゴロ　ニャーゴ

したれば、いままで明るかったどご、ぽかっと明かりが消えたように暗くなって、身動き出来なくなってしまったど。土、みな寄ってきてしまって、餅も食わねぇ、銭も、どごさいったか、わけわがんなぐなって、土かきわけ、かきわけ、モグラみでぇに泥だらけんなって、帰(けぇ)ってきたんだと。おばんつぁんは、

「じんつぁま、なんぼ金(かね)持って帰(けぇ)ってくんべ」

って、ヘラで尻叩(けっただ)いて待っていたが、まず、じんつぁま、その格好だから、たまげてしまったんだと。

だから、あまり欲濃(こ)くするもんでねぇどしゃ。

これで　よんつこもんつこ　さけだどしゃ

みやぎ民話の会叢書第十集

「登米郡南方町の民話　青島屋敷老翁夜話　上巻」より

六　一粒の豆っこ

むかぁしむかし。

あっとこにね、ずんつぁまとばんさまがいたんだと。

ある時、ずんつぁまがね、庭掃ぎしてたんだって。そうしたら、豆っこ一粒見っけたんだっつぉん。

「ばんさまや、ばんさま。豆っこ一粒見っけたげんとも、この豆っこ、なじょすんべなぁ」

って聞いたんだと。

「みな豆粉にしたんでは、いだましいしすっから。ほだね、半分は種っこに、半分は豆粉にすんべし」

って語ったと。

それから、ばんさまが、半分の豆っこをね、カラコロ、カラコロと焙烙で炒ったんと。そいつを、こんどは、臼さ入れて、手杵で、スットントン、スットントンと搗いて、豆粉にしたんだと。

ほしたっけ、ふしぎなことに、搗けば搗くほどだんだん増えて、たちまち一升になってしまったんだって。ところが、豆粉をふるうころす（ふるい）持ってねがったんだとね。ばんつぁまが、

「ずんつぁま、おら家でころすねぇんだけっども、なにでこの豆粉おろす（豆をふるう）べや」

って言ったんだと。

「んだなぁ、ほだらば、おれの褌の端っこででもおろしぇっちゃ」

って、ずんつぁまの長ぇ褌の端っこで、ばふらぁーばふらぁーと、おろしたんだと。

そうして、その豆粉でね、豆粉だんごこっしぇで（こしらえて）、ずんつぁまとばんさまは、腹いっぺぇ食ったんだと。夜になって、

「残りの豆粉、どこさ置くべや」

つうことになったつぉね。

「戸棚さ置けばネズミに食(か)れっし、床さ置くとネコに食(か)れっし、んだらば、おらだちの寝る間(あいだ)こさでも置くべやぁ」

つうことになったんだと。

ところが、夜中にね、ずんつぁまが、ボォーンと大(おっ)きな屁、たれてしまったんだと。

そしたっけ、その豆粉、さっぱと吹っ飛んで、ばんさまのへそから尻(けっつ)から、みんなくっついてしまったんだと。ほしたら、じんつぁまがね、

あったらもんだなぁ　ペタ　ペタ　ペタ

あったらもんだなぁ　ペタ　ペタ　ペタ

って、みんな、舐(な)めたどっしゃ。

えんつこもんつこ　さげしたっと。

みやぎ民話の会叢書第九集

「『母の昔話』を語り継ぐ　―登米郡迫町新田の民話―」

より

七　豆っこ話

むがぁす。

あるとごろに、じんつぁまとばんさまあったど。

ある時、じんつぁまが庭掃いったっけ、豆っこ一粒ころがってきたっつもや。ほんで、その豆っこば拾って、

「ばんさまや、ばんさま、この豆っこなじょにする」

って語ったど。ばんさま、

「半分が種で、半分が豆粉にすべぇ」

って語ったんだど。

んで、半分はしまっておいて、半分の豆を焙烙でからっこ、からっこど炒ったんだど。そして、臼でとっことん、とっことん、とっことんと搗いたど。

ところが、その豆っこ、おろす（ふるう）のがねがったっつぉん。

「ばんさまや、なじょにして豆粉におろすべや」

「んで、じんつぁまのふんどす外して、おろすべや」

じんつぁまのふんどすの端っこでくっつ、くっつ、くっつ、くっつと、おろすたど。

さあ、豆粉出来上がったど。

「ばんさまや、この豆粉どごさ置ぐべなぁ」

「上さ置けばねずみに食れっす、下さ置けば犬ぁ来っす、棚さ置けば猫来っす。どごさも置ぐどごねえっちゃなぁ」

って語ったんだど。そしたっけ、ばんさま、

「なぁに、おれどじんつぁまの寝る間っこさ置ぐべ」

そこで、じんつぁまとばんさまがあどつぎ（一枚の布団に頭を反対側にして互い違いに寝ること）して寝でだ間っこさ、置いだど。

そしたら、夜中にじんつぁま、大きい屁、ぼぉぉんと放だっつぉんやぁ。したっけ、その豆粉飛んでって、ばんさまの種っこ（女性器）さくっつがったどや。

んで、じんつぁま、

「ああ、もってぇねぇ」

って語(かた)って、なめて取ってけだっつなぁ。ぺた、ぺた、ぺたぁど。

えんつこ　もっこ　さげだ

昔話の一番はじめに語るのがこの話なんだよ。

みやぎ民話の会叢書第十一集

「栗駒町猿飛来の伝承　楳原村男翁の唄と語り」より

八　豆っこないでばやぁ

むかーし、あったづでや。

じんつぁんとばんつぁんとふたりで暮らしていたんだと。あんまり仲いいから、ひとつ布団(ふとん)さくぐって、いつも寝ていたつんだ。

お正月来るっていうので、じんつぁんとばんつぁん、豆粉(まめご)つくることにしたんだと。えらく大(おっ)きな豆ひとつ、半分にわって、半分は種豆だからって、こっちさとっておいたと。半分は豆粉にして神さまさお供(そな)えしなくてわかんねって、ふたりで、午前中かかって、グルグル、グルグルと石臼で豆粉つくったとしゃ。

さて、夜になって、神さまにお供えしてのこった豆粉、なじょしてしまっておくべとなったと。

したら、じんつぁんが、

「ほだなぁ、上さあげておけっちゃ、火棚(ひだな)の上さ」

って言ったと。したら、ばんつぁんが、
「だめだ。火棚の上さあげっと、ネズミに食(か)れっから」
って言ったつうんだ。
「したら、下さおけっちゃや、かごかぶせて」
って言ったれば、
「ネコに持っていかれっぺや」
って言ったつもなぁ。
ばんつぁん、どこさもおくとこなかったんだって。
じんつぁんが、
「ほで、婆(ばば)や。ネズミにもネコにもとらんねように、ふたりの背中のまん中さ豆粉おいて、寝べっちゃや」
って言ったと。したら、ばんつぁんが、
「爺(じじ)、屁ばりたってっから、豆粉ふっ飛んでいくとわかんねから、背中向けらんねべ」
って言ったつも。

「ほんで、腹(はら)合わせして寝っから」
って、むかい合って寝ることになったんだって。
夜中になると、じんつぁん、いつもの気持ちで、豆粉おいたの忘れて、えらい屁たってしまったつうんだ。ばんつぁん、
「屁ばりたって困ったなぁ。豆粉、屁くさくなったべなや」
って言ったと。
つぎの朝になったれば、
「豆粉ないでばやぁ。爺、屁ばりたるから、ふっ飛んでいったんだべ」
ってなったと。
じんつぁん、布団開けて見たれば、どこさふっ飛んでいったのか、豆粉ないんだと。
「おかしいこったな」
ってさがしてみたれば、ばんつぁんの大事などごさくっついていたっけど。

したれば、ばんつぁん、
「いたましいなぁ」
って言うんだなぁ。
しかたがないから、じんつぁん、みんななめてしまったと。
そんで、ばんつぁんは、さっぱりなめないで終わってしまったんだと。

みやぎ民話の会叢書第七集
「小松仁三郎のむかし語り・はなし語り
どーびんさんすけ　さるまなぐ」より

メモ欄としてご自由にお使い下さい

メモ欄としてご自由にお使い下さい

ー民話　声の図書室プロジェクト　DVD のご紹介ー

「民話声の図書室プロジェクト」とは、「みやぎ民話の会」が約 45 年にわたって記録してきた、宮城県を中心とする民話語りの映像・音声を、せんだいメディアテークと協働し、だれもが活かせる共有財産として、未来へ受け渡していこうとする活動です。これまでに、9 名の伝承の語り手による民話語りの DVD が 24 タイトル完成しています。

「さらに色々な語り手さんの語りを聞いてみたい」と興味が湧いた方は、せんだいメディアテーク 2f 映像・音響ライブラリーで配架中の、「民話 声の図書室プロジェクト DVD」を、ぜひご利用ください（閲覧・貸出が可能です）。 土地の声で語られる民話に、耳をすませてみませんか？

《「豆粉の話」が収録されている DVD タイトル》

『登米市迫町の伊藤正子の語り ［2］』
「豆っこと地蔵さま」、「一粒の豆っこ」、「ネズミの餅搗き」

『登米市南方町の永浦誠喜の語り ［1］』
「一粒の豆」、「豆と地蔵さま ー地蔵浄土ー」

◉ これまでに制作した DVD のタイトル一覧 ◉

- 登米市南方町の永浦誠喜の語り [1]-[3]
- 栗原市一迫町の佐藤玲子の語り [1]-[2]
- 遠野市宮守町の佐々木 健の語り [1]-[2]
- 登米市迫町の伊藤正子の語り [1]-[3]
- 黒川郡大和町の曾根つき子の語り [1]-[4]
- 伊具郡丸森町の佐藤秀夫・松崎せつ子の語り [1]-[3]
- 伊具郡丸森町の佐藤秀夫の語り [1]
- 亘理郡山元町の庄司アイの語り [1]-[4]
- 加美郡加美町の引地田路子の語り [1]-[2]

主催：みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム、せんだいメディアテーク
助成：一般財団法人　地域創造